

京都の未来像（案）について

① 理念的な未来像

● 地域主権時代のモデル都市

～ 京都発，京都流 ～

京都市民は、もとより京都市民の幸せの最大化と京都のまちの発展を一番大切にしている。同時に、京都は「世界のなかの京都」という大きな視野のなかで、その歴史的な知恵を生かし、都市文明のあるべき姿を率先して追求するという役割を国のみならず世界から期待されている。

基本構想の前半の10年間において、例えば、大都市の新たなまちづくりの道筋を示した新・景観政策や「DO YOU KYOTO?」と引用されるに相応しい先進的な環境政策、国のモデルとなった小中一貫教育等の学校改革や障害者自立支援での京都方式など、様々な先駆的な取組が実現された。

後半となる次期基本計画においても、一層の創造的な取組が期待される。

将来の都市の発展のために今求められるものは、地方分権を進展させ、市民、企業などの多様な参画主体と行政の役割分担と協働によって個性と魅力に溢れたまちづくりを進めることである。そして、今後更に10年以上先を見通したとき、「共汗型計画」としての次期基本計画は、「地方分権」の流れの先にある市民本位の真の「地域主権」の確立を展望することが求められる。激動する時代であるからこそ、大ぐくりで未来像を共有しつつ、時代の変化に柔軟に判断、対応することがますます重要となってくる。そして、それを可能とする権限、財源、そして人間が地域に備わっていることが地域主権である。

また、「京都らしさ、独自性」、「将来大きく育つコンセプト」、「制度や分野の枠にとらわれない」といった視点をもって「地域主権時代のモデル都市」としての今後の政策展開に当たり、国内外に新たなモデルを提示し（京都発）、一律的ではない京都が育ててきた美意識や得意技によって豊かさを追求する（京都流）ことが望まれる。

＜研究会における主な委員意見＞

- 「オリジナル施策群(市,あるいは,地域の自主的制度・ルール)を,案出・決定・運用するスタイルの重視,また自主的制度・ルールの可能なしくみへのさらなる準備」
よく言われることではありますが,全国一律にかかる制度の上で,地域の実情を踏まえた実効性ある施策をどのように出せるか,について具体的に施策群として(法制度的にも整合しつつ)独自スタイルを実施できるという意識が広く認識されてあること自体が,京都の強みだと思えます。様々な部門で,地方への権限移譲の話題もきかれます。また,とくに今後,首都圏型の開発動向とは異なる都市運営のモデルが必要であり,京都モデルのほうが参考になる歴史都市は数多くあります。
- 「市民が,自身の成長と京都の成長を同時に感じられる都市」を目指すために,京都で暮らす市民や京都で働く人々が,自己の成長と京都の成長をエンゲージメント(双方の成長に貢献しあう関係)できるように政策を進めていくべき。
- 「共汗の実質化」として,共汗を『印だけの住民参加』ではなく『住民の力が活かされる住民参加』として実質化していくことが大切
- 「誇りある伝統の再創造」
 - ・ サービスの「消費者」としてではなく,行政への主体的な参加を住民にもってもらうには,まず京都への帰属意識を高めることが必要。京都に暮らすことに誇りをもち,その誇りをさらに高めていくプロセスに参画してもらう方策を。
 - ・ 京都が受け継いできた伝統を継承し守ることに加え,新たに次世代に引き継いでいく伝統を創造することが大切
- 「環境」「国際」「ひと(人材)」「オンリーワン」
 - ・ 地球温暖化にともなう社会経済活動全般への深刻な影響が懸念される中,最も必要とされているのは,地域社会において実効性のある政策が地域住民の参加によって実行されることである。
 - ・ 京都で,実効性のある低炭素社会の実現にむけた取り組みや制度を世界に示すことが,京都の世界に対する責務でもあり,京都の活力にもつながると思われる。
 - ・ 「ナンバーワンよりオンリーワン」を目指していきたい。例えば,国内だけで考えても,「オンリーワン」と呼べる大都市は,東京と京都だけである。東京は日本の首都であり,一極集中の都市国家の中心地として,「オンリーワン」となるのは当然であるが,京都は400年の長きにわたり都が置かれた地である。その国際的な知名度や豊かな伝統文化などの点でも,将来にわたって他の追随を許さないだろう。
 - ・ 京都は,多様な人材が世界から集まってくる都市を目指すべきではないだろうか。それが地域全体の活性化にもつながる。
- 「世界に誇れるまち京都」
外から期待される京都の未来像(イメージ): 歴史都市,観光,世界遺産,古都,山紫水明.....
- 「よかった,京都で暮らして」=日常性を重視する生活者の視点から考える京都
京都を訪れる場所としての魅力は言うまでもなく,「暮らす」という意味においても,魅力的な場所であって欲しいと願う。
- 市民が安全で安心して暮らせる(老いることができる,子育てができる,働くことができる,学校に行くことができる...)京都市へ。
- 公,民協働によるセーフティネット(介護,育児,就労,社会参加,生活の支援と失業,貧困対策)の充実を。
- 与えられる社会福祉から,住民参加と公民のパートナーシップにより構築されていく社会福祉(地域福祉)へ。
- 多様な社会参加の「機会」と,様々な社会的「居場所」が保障されるということが大切
- 「生きる場所」としての地域社会・地域空間の再構築を。
- 「モノの豊かさ」から「関係性(人とのつながり)の豊かさ」へ。

② 具体的な未来像

「地域主権時代のモデル都市」というまちづくりを進めるうえでの理念・価値観をベースとして、概ね10年後の京都において、生活・地域と都市の2つの視点から、市民、企業と行政がともに目指す目標として、以下の4つの「具体的な未来像」を例示的に提案する。

<当初案>

少子高齢化時代のモデルとなる

～ 全ての市民に笑顔と夢，安心と生きがい ～

● 誰もがすべてのライフステージを楽しめるまち

～ 子ども，若者，お年寄りに笑顔，安心，いきがい，夢を ～

少子化による子どもの減少とともに、若年層や高齢層の単身世帯比率の増加など、社会の基礎単位である家族像の変化が進みつつある。更に、今後我が国の人口は減少を続け、京都市においても人口減少が進むと見込まれるなか、社会の様々なひずみが拡大していく可能性がある。

それぞれの世代の置かれている状況に対応した基礎的なセーフティネットが整った社会の構築等が必要である。そのうえで、全ての市民が笑顔を絶やすことなく、夢と希望を持ち、安心と生きがいを持って暮らせる安定的な社会の構築が求められる。

その課題の解決の基本は京都の誇る「地域力」であり、かつての地域社会がもっていた住民の相互支援のしくみを、現代の生活環境に合うようなかたちにつくり直す工夫が必要である。「大学・学生のまち」として人口の1割を占める学生など、若者たちが京都でいきいきと学び、働くだけでなく、地域力の担い手となるなど、「与える」－「与えられる」といった一方通行の関係ではなく、「互いに教えあい、学びあい、人生を楽しむ」仕組みが根付いたまちを目指すべきである。

<研究会における主な委員意見>

- 様々な課題(子育て、ひとり親家庭、子どもの遊び、世代間交流、独居高齢者の生活、住民のネットワーク、ボランティア、不登校児童、子どもの学校生活、在宅介護者、就労等)の横断的解決のベースは「地域力」である。
- 他者への「想像力と共感力」を育むことが必要
- 適度な「おせっかい」と「助けられ上手」を志向する関係(つながり)づくりが必要
- 公、民協働(パートナーシップ)によるセーフティネットの充実が必要
- 市人口の1割を越える学生数の大多数が市外へ転出することを抑制するための総合的な対策が必要
- 教育の基盤を支えるコミュニティの再生が必要

<当初案>
地域抱える力を高める
～ ソーシャルキャピタル倍増 ～

● **助け合う地域，見守る社会，住み続けたい京都**

～ **これまでの資源を活かした市民主体による京都ならではの風を感じる
コミュニティづくり** ～

共通する興味や関心を媒介とした「テーマコミュニティ」が発達する一方で，既存の地域自治組織では担い手の高齢化や若年層等の参加の減少が進むなど，京都の最大の社会資本（ソーシャルキャピタル）ともいえるべき，「地縁コミュニティ」に弱体化の傾向が見られる。この結果，これまで地域が予防的に解決してきた児童・高齢者虐待や孤独死など，「安全・安心」に関わる様々な課題が，社会問題として顕在化し，行政はいわばそれへの対症療法的な対応に多くの労力を投入する必要に迫られる。そして，そのことは，行政の専門部署での対応ゆえに地域の縦割りを生じさせ，結果として地域の「絆」を更に弱体化させかねない。

現実に差し迫った課題に応急的にでも対応しなければならないことは当然のことであるが，その一方で，地域で生じる様々な問題を解決するためには，地域で暮らすだれにも人のつながりと居場所があり，それぞれの立場や得意技を活かして地域のことを担い，地域の抱える力を高め，厚みのある共助を築いていく，いわば漢方薬的な施策をとることが，持続可能な福祉先進モデルと言えるのではないか。

<研究会における主な委員意見>

- 児童虐待，高齢者虐待，孤独死，自殺，不登校，引きこもり，貧困，ワーキングプアなど，様々な社会問題の背景には「社会的孤立」があり，その対策として，「一人にしない」地域づくりが重要
- 社会的なつながり（社会参加の機会）と地域における様々な「居場所」づくりが必要
- 「生きる場所」としての地域社会・地域空間の再構築が必要
- 住民の地域自治力の向上（自律的なまちづくり）を図ることが必要

<当初案>

環境先進都市になる

～ 環境を基軸に京都型の経済・生活スタイルの開発 ～

● 京都らしさを生かした環境先進都市

～ 環境を基軸に新たな京都型の生活・産業・観光・交通スタイルの開発 ～

地球温暖化の進行の中で、化石エネルギーに依存する社会から低炭素社会に転換することが世界共通の重要な課題となっている。そのため、市民一人一人の日常生活から都市全体の構造にいたるあらゆる場面で、環境への視点を基軸とした経済・生活の転換が求められている。

京都は、単に京都議定書の採択の地としてではなく、これまでから、山紫水明の自然環境を愛で、独自の文化や生活様式のみならず、産業活動すらも環境との共生を基本としてきたまちである。

したがって、単なる「節約」や「配慮」にとどまらず、京都らしさを活かした都市の真の美しさや、ヒューマンスケールによる豊かな都市生活を育む新しい京都型のスタイルの構築を進め、まちのどこにも市民が誇れる魅力が溢れ、公共交通が便利で、散歩や自転車が似合うなど、我が国を牽引する京都型の生活・産業・観光・交通スタイルを開発し、発信すべきである。

また、その結果、国内外の観光客を一層ひきつけることにつながり、京都市民にも還元されるという好循環を招くこととなる。

<研究会における主な委員意見>

- 魅力溢れる賑わいのある都市空間(市民, 国民, 世界の人々にとって, 景観・街並み, 歩行環境, アクセス性, 安心・安全など)の形成が必要
- 京都がより美しい街並みになることが, もっとも観光客の増加につながる。
- 人口減少, 超高齢化社会, 持続可能, 低炭素社会, コンパクトシティ, 都市の魅力・賑わい・活力などがキーワード
- 地域にあわせた都市空間構成への誘導が必要
- 自動車依存からの脱却, 環境にやさしい交通手段によるまちづくりが必要
- 地球温暖化対策を重視し, あらゆる施策の中へ組み入れるべき。それを担保するための仕組みが必要
- 2013年以降の次期削減目標を意識した高い目標設定, 市民参加の重視が必要
- 実効性ある低炭素社会の実現に向けた取組や制度を提示すべき。

<当初案>

京都の強みを生かして都市の活力を高める
～ 文化力を磨き, 多面的に活用 ～

● **交流の場を広げ発展し続ける都市**

～ **ひと・もの・情報を呼び込み, 経済を活性化させる** ～

京都を将来にわたって持続可能な都市としていくには、都市の経済的・文化的な活力の維持が必要であり、そのためには、他都市にはない京都の強みである多様な文化力を生かし、多面的に活用していくことが重要である。

伝統と先端、またそれを担う人と人が相互に刺激しあい、技と知恵を融合することで、さらに高い産業や文化を生み出し、世界に発信する京都の構築をめざすべきである。また、このことを通じて、新しい交流が生み出され、常に新たなチャレンジが生まれるような循環の仕掛けが求められる。

<研究会における主な委員意見>

- 京都が世界からアートで注目を浴びる都市にすべき。
- 現代アートはイノベーションのきっかけとなる。先端企業との連携や外貨獲得、観光客の誘致、時代の先端を行く人々が京都を訪問するようになるなど、有効な手段
- 都市イメージにつながる文化資源の積極的な活用を。特にその知的資産の情報運用が必要
- 「映画の都」としての魅力を発信すべき。
- 目標観光客数5000万人の次(各分野との連携、単なる宿泊数重視でなく)を明確にすべき。
- 観光客の増大だけでなく、世界の頭脳が京都という場に集い世界に発信するようなことをめざすべき。
- ハード・ソフト面での外国人受入体制整備の整備が必要。世界的な企業の研究所誘致などが考えられる。

未来像と重点戦略との関係図＞

